ブラジルにおける金融空間の構造

高橋　伸夫・ネルソン－マサタケ－ヨシカエ

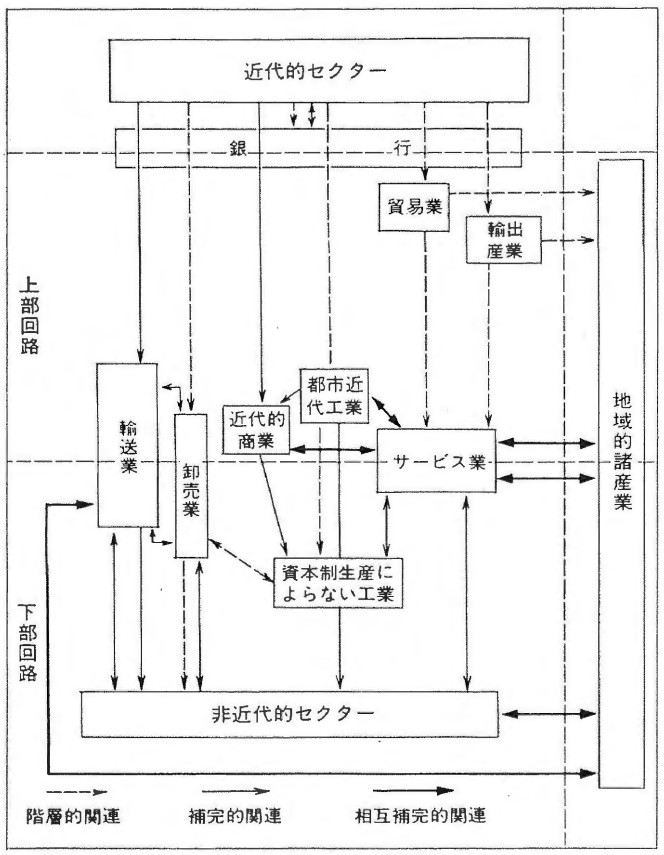
Ⅰ　はじめに
Ⅱ　ブラジルにおける金融空間の構成
　Ⅱ－1　資金の地域的偏在
　Ⅱ－2　資金の地域的流動
　Ⅱ－3　金融機能による都市システム
Ⅲ　São Paulo 州における金融空間の構成
　Ⅲ－1　資金の地域的偏在
　Ⅲ－2　São Paulo 市都心部における金融空間
　Ⅲ－3　日系銀行による店舗網の拡大
Ⅳ　むすび

Ⅰ　は　じ　め　に

金融活動は，地表の諸事象を生成させる重要な要因であり，その活動を分析することは地域のとくに経済活動を理解するうえできわめて有効な視点である．人類の所産である金融活動も当然のことながら地球表面において地域的差異が厳存するため，金融活動は地理学の対象になり得る．

資金の地域的な蓄積には，差異があり，そのために資金の地域的流動が生じる．資金の流動は，当然のことながら人間活動のうち，とくに経済活動に基づく結果である．ある場合には，資金の地域的流動は，物資の流動を引き起こし，あるいは逆に物資の流動の結果，資金が地域的に流動もする．さらに，ある地域に資金が投資され，そこに新たな雇用が生ずれば，人口移動が引き起こされるため，資金の地域的流動は人口移動をも誘因する．

一方，金融活動はその地域の人間活動を忠実に表現するために，金融活動による同一指標によって地域間の比較が可能になる．また，資金は地域的に縦横に流動し，各地域相互間を結合させる機能を有している．その様相は国



第1図　発展途上国における二つの都市経済セクター
(M. Santos による)

内のいかなるスケールの範囲内にとどまることなく，国境をも越えるものである．とくに，近年では，国際的な金融資本が店舗網を国外へ拡大しつつあり，資金が世界的な規模で流動しつつあることは顕著な事実である．

本報告は，新大陸にあるブラジルを研究対象として，金融の空間構造を分析することを目的とし，資金の蓄積・流動がいかになされて金融機能によって空間的秩序が成り立っているかを明らかにしようと試みるものである．

Miton Santos が述べるように，発展途上国における都市経済は近代的セクターと非近代的セクターからなる．前者の近代的セクターの要となるものに銀行があり，それを基にして輸出産業・貿易業・都市近代工業・近代的商業・卸売業・輸送業などが存在する．金融機関である銀行は，近代的セクターを構成するあらゆる部分と関連し合い，ときには従属的な関連が成り立っている場合もある．このような銀行を中心とした上部回路（upper circuit）は資本集約的な技術を駆使しながら先進諸国と貿易を通じて係わり合っている．

一方，発展途上国においては資本制生産に至っていない製造業やサービス業・卸売業・輸送業の一部からなる非近代的セクターが存在する．これらの下部回路（lower circuit）は非資本集約的・労働力集約的であり，きわめて小規模な業者からなっている．この部分には，金融機関のうち大規模なものである銀行の役割は小さく，より小規模な金融機関・金融業者が活動する．

したがって，発展途上国には金融機能においても上部回路・下部回路が存在する．本稿では金融機関として銀行のみを取り上げているため，都市経済の主として上部回路のみを考察している．

ブラジル全土の州別統計に関しては，ブラジル国立地理院（IBGE）が発行する Anuário Estatístico do Brasil, São Paulo 州に関しては Fundação Sistema Estadual de Análise de Dados (SEADE) が発行する Anuário Estatístico do Estado de São Paulo を使用し，その他南米銀行(Banco América do Brasil do Sul) などの銀行が発表する統計類を参考にした．São Paulo 市内の金融機関の立地に関する現地調査は1982年７・８月に行った．

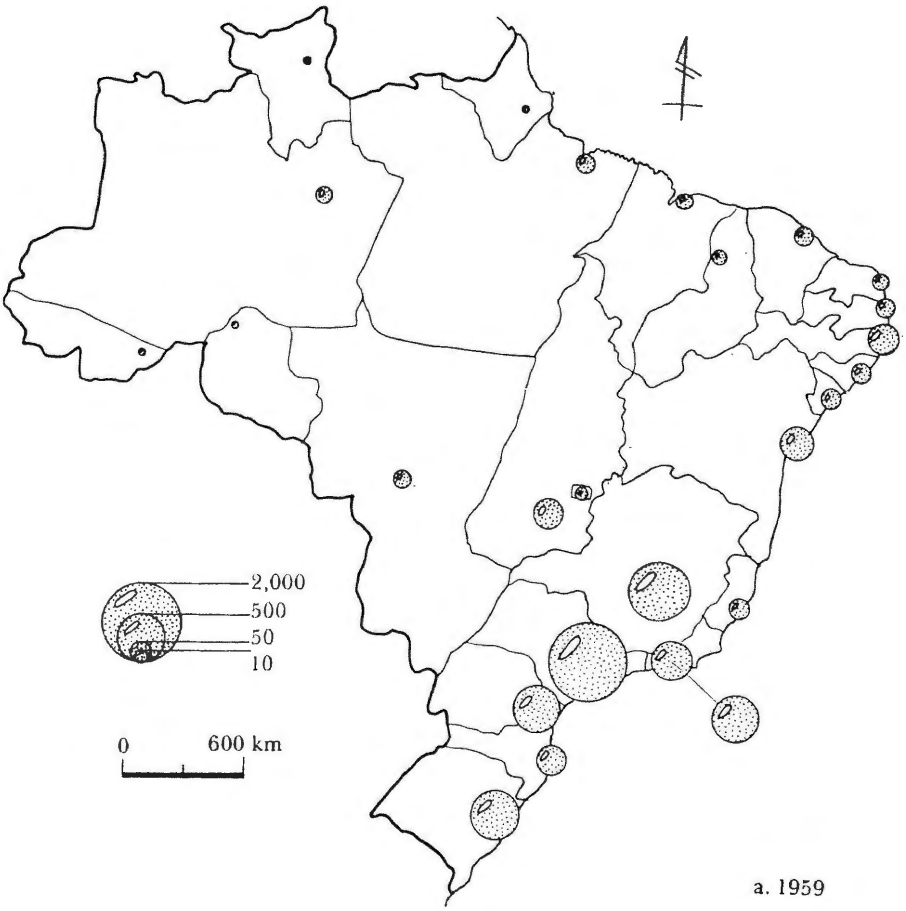
研究対象としたブラジルは，1930年代初期からコーヒーのモノカルチャーから多角的な経済へ移行を開始していた．1950年代後半には，急速な工業化が展開し，あらゆる消費財工業はもちろん，自動車工業などの飛躍的な発展があり，1960年代後半から奇跡的な経済の高度成長をなした．

工業化による経済の高度成長によって，1970年代からアマゾンをはじめ未開地における道路建設，公的な植民事業，民間の植民活動，税制上の優遇措置による開発投資の奨励など地域開発事業も活発化してきた．この過程における金融機能とくに，公的金融機関の果たす役割は大きい．

一方，急速な工業化によって公共事業投資を中核として歳出が急増し，債務の膨張とともに銀行券を増発したために，インフレーションの悪化を強めている．外国への負債，とくにアメリカ合衆国からの資金の借用は，経済的にアメリカ合衆国の支配下へと組み込まれてゆく過程でもあった．

Ⅱ　ブラジルにおける金融空間の構成

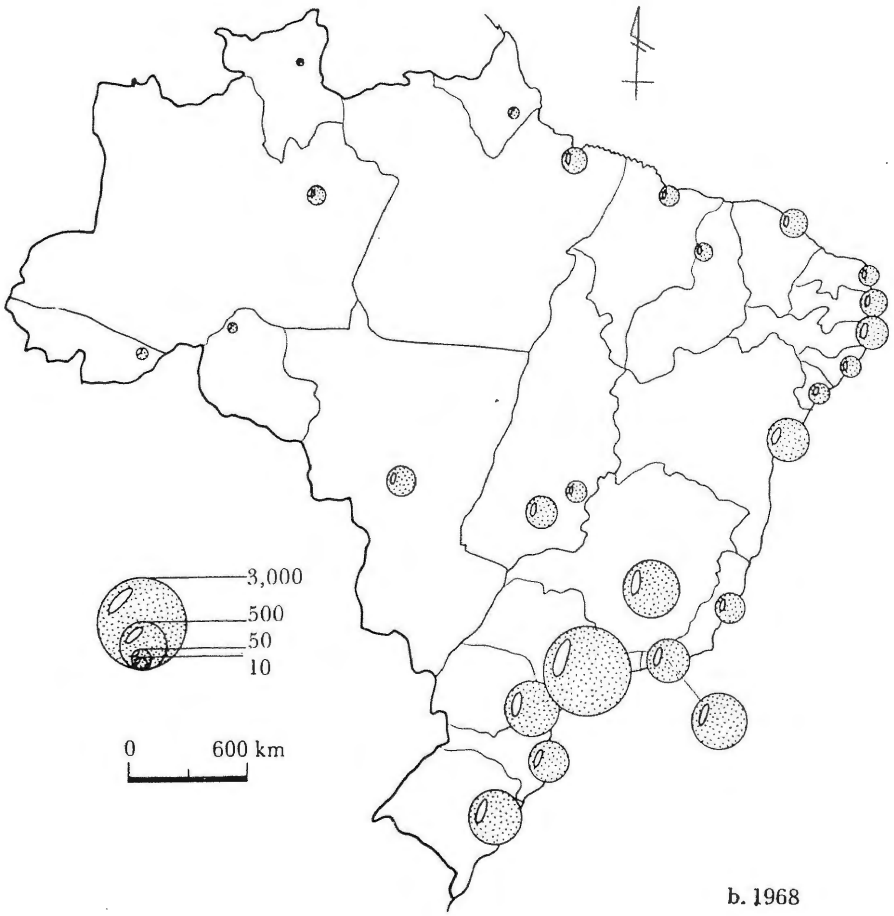
Ⅱ－１　資金の地域的偏在



第2－1図　州別銀行数の分布
（資料：Anuário Estatístico do Brasil（IBGE）他による．第3～6図も同じ）

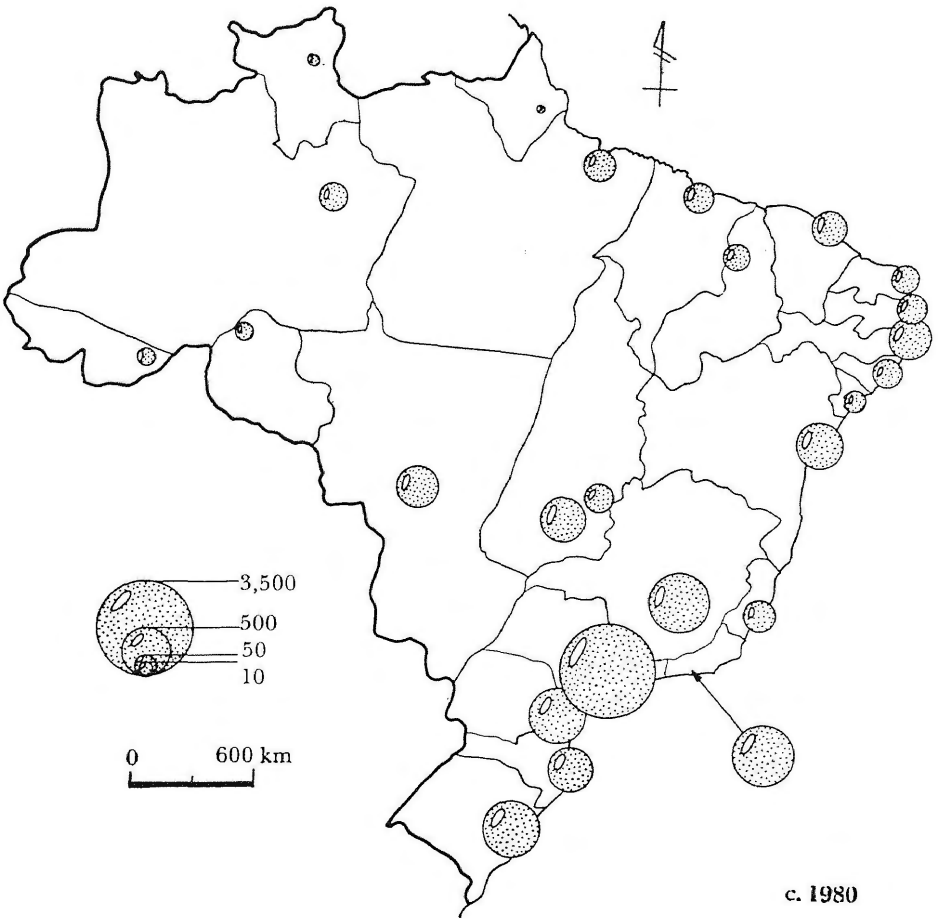
ブラジルは，現在，27の行政区からなる．すなわち，22州，4連邦直轄領，1連邦区が存在し，また，それらがいくつか集って Norte, Nordeste, Centro-Oeste, Sudeste, そして Sul の五つの地方に分割されている．

まず，ブラジル全体の金融空間を，Fundação Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística が発行する州別金融統計によって，概観をしたい．資金を取り扱うものに金融機関があり，ここでは，銀行（国営銀行，州立銀行，市中銀行を含む）の地域的分布と資金量の地域的分布を，経年的に1959, 68, 81年の3カ年について検討してみる．



第2－2図

第2図は州別による銀行数の分布状況を示している．図に示されているように，海岸部に位置するSudeste と Sul の両地方に銀行の地域的集中が著しい．1959年現在，両地方に立地する銀行数を合計すると，全国総数の87.7%にも達する．とくに São Paulo 州への銀行の地域的集中が著しく，同州を囲んで Minas Gerais 州，Guanabara 州に銀行が集中して立地していた．換言すれば，Sudeste 地方における São Paulo, Rio de Janeiro そして Belo Horizonte の三都市を頂点とし，それぞれの三地点を結んだ三角地帯にブラジルにおける金融機能の中核が存在した．それに対して，Norte, Centro-Oeste 両地方においては，金融機関の立地の空隙地帯が存在し，それぞれの地方において，全国銀行総数の1.2%，2.6%にしか達しなかった．したがって，ブラジルにおいては，銀行の立地の様

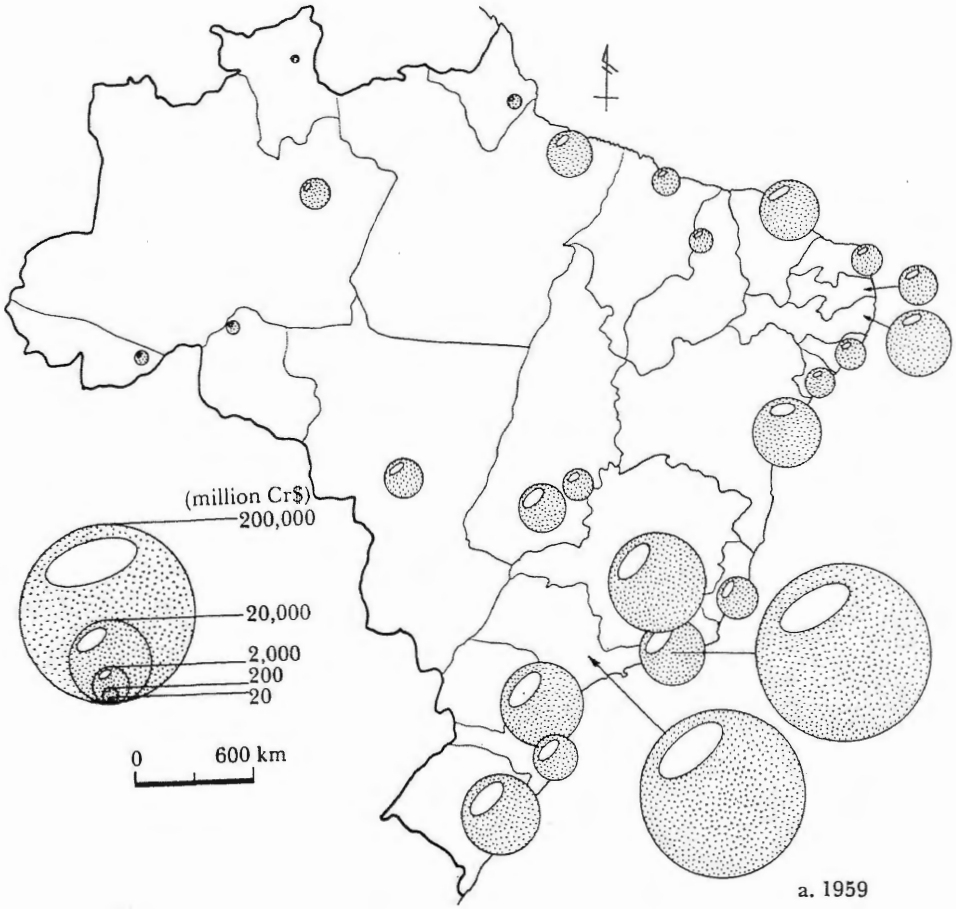


第2—3図

相からみても，海岸部と内陸部に大きな差異があり，銀行の集積が相対的に進んでいた海岸部においても，Sudeste 地方への集積が著しく，地域的なコントラストが顕著であった．

1968年になると，1959年当時の金融空間と基本的には大きく変容していなかったが，多少の変化が生じはじめていた．銀行数からみて，Sudeste と Sul 両地方の卓越性が相対的にわずかに低下してきた．それに対して Nordeste と Centro-Oeste 両地方の比重が増してきた．とくに前者においては Bahia 州，後者においては Mato Grosso 州と Distrito Federal (Brasília) の両地区において銀行の集積をみた．

Bahia 州を例にとると，第1表に示してあるように銀行数が急増している．州都 Salvador を中心



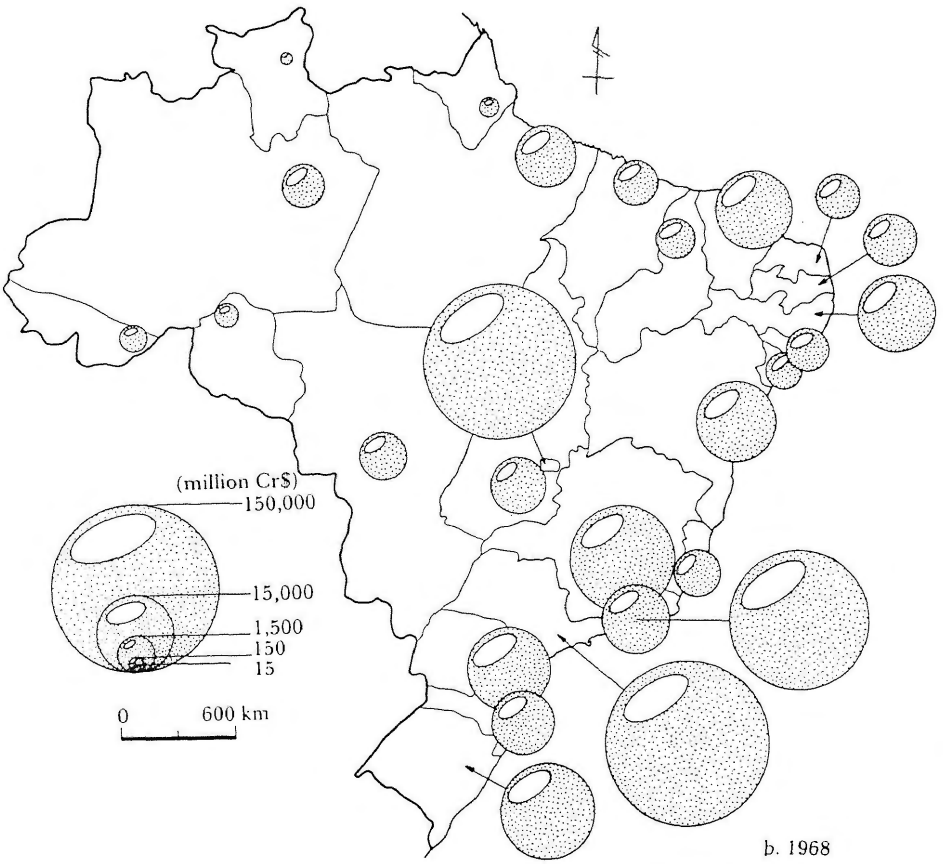
第3－1図 州別預金額の分布

として，銀行の立地が進んでいる．とくに1980年以降，その傾向が顕著であり，1960～70年間には，銀行1店舗のみを有するミニシピオ数は56から105と倍増し，そののち1970～80年には約2.5倍の増加をみた．この増加傾向は，2～4店舗を有するミニシピオ数や5店舗以上を有するミニシピオ数の増大にも認めることができる．そして，1980年にはBahia州においては，5店

第1表 Bahia州における銀行立地数の変化
(1940—80年)

	銀行1店舗のみを有するミニシピオ数	2～4店舗を有するミニシピオ数	5店舗以上を有するミニシピオ数
1940年	15	8	1
50	32	15	1
60	56	24	3
70	105	38	8
80	255	89	11

Bahia州発行の資料による

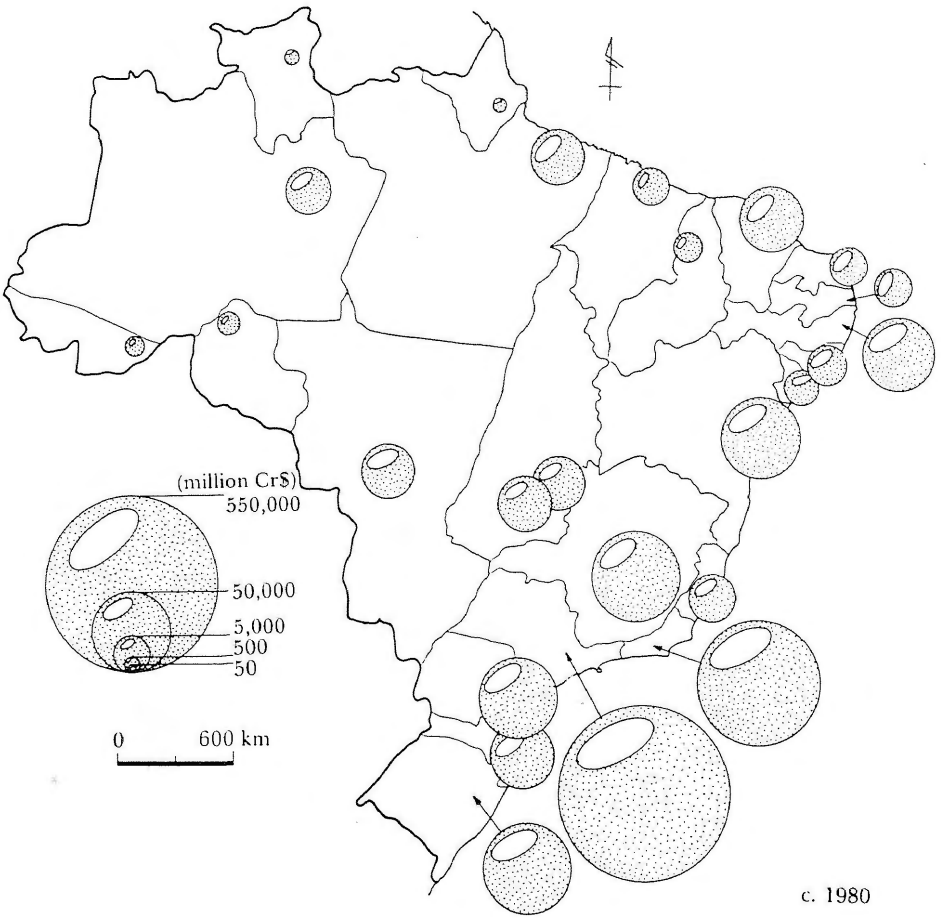


第3—3図

舗以上を有するミニシピオは11となり，州内に銀行店舗密度を高めると同時に，銀行店舗網を強固なものにしつつある．

一方，1968年現在，Norte 地方に立地する銀行数は全国的にみてその比重が依然として低かった．

1981年になると，Sudeste と Sul 両地方に存在する銀行数は，全国総数と比較すると，76.4%と低下し，その比重はさがる一方であった．それに対して，Nordeste と Centro-Oeste 両地方における銀行の集中度は除々にではあるが高まりつつあった．しかし，依然として銀行の São Paulo 州への集中は変わらず，全国比で33.1%と全国の3分の1の銀行数を集めて，優位性は変わらなかった．このように特定な地域への集中とともに，全国的にみると銀行が次第に均等に立地する傾向を認める

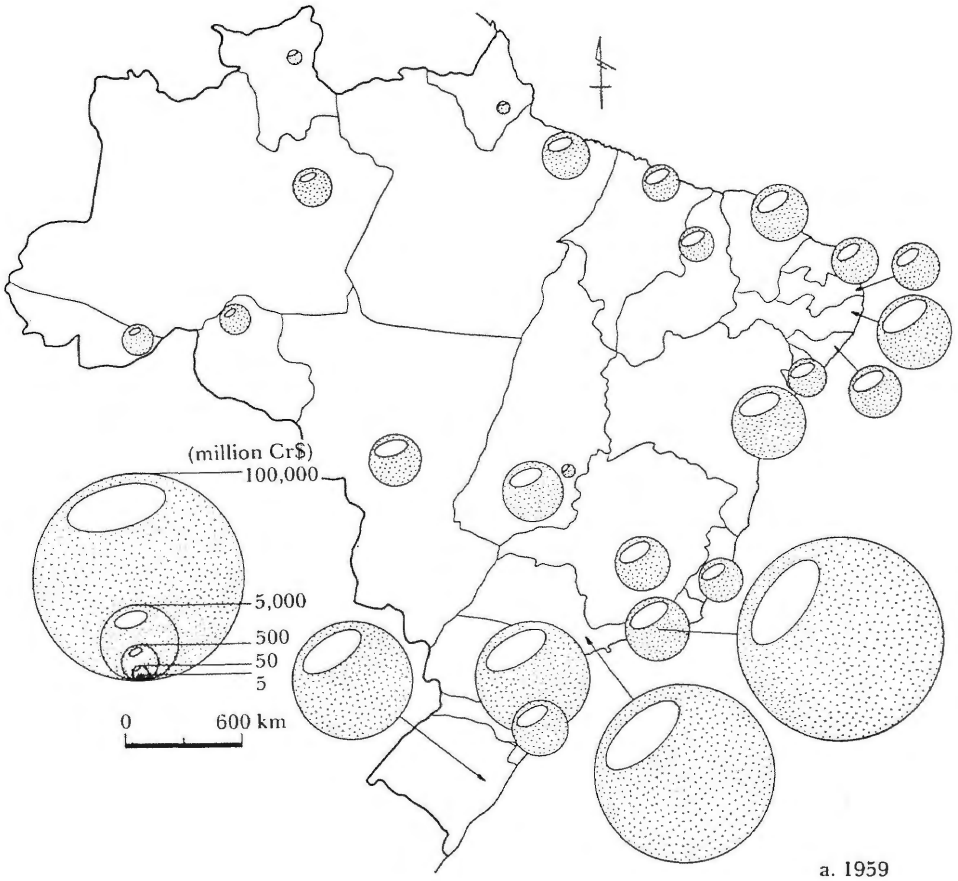


第3—4図

ことができた.

ただし，上記にみた銀行の分布は，銀行の絶対数のみを考察したものである．ブラジルにおいては，それぞれの銀行店舗の預金額に応じて六つのカテゴリーに分類されている．最も規模の大きな二つのカテゴリーに関して州別比率をみると，São Paulo 州には 47.5%，Rio de Janeiro 州には21.6%が集中している．すなわち，銀行のうち最大規模の数が，両州のみにおいて全国の約70%が集中していることになる．

以上のような金融機関の地域的分布は，当然のことながら，預金額と貸付金額の地域的分布と同様な傾向を示している．ただし，1959年においては預金額・貸付金額とも，Rio de Janeiro が位置する

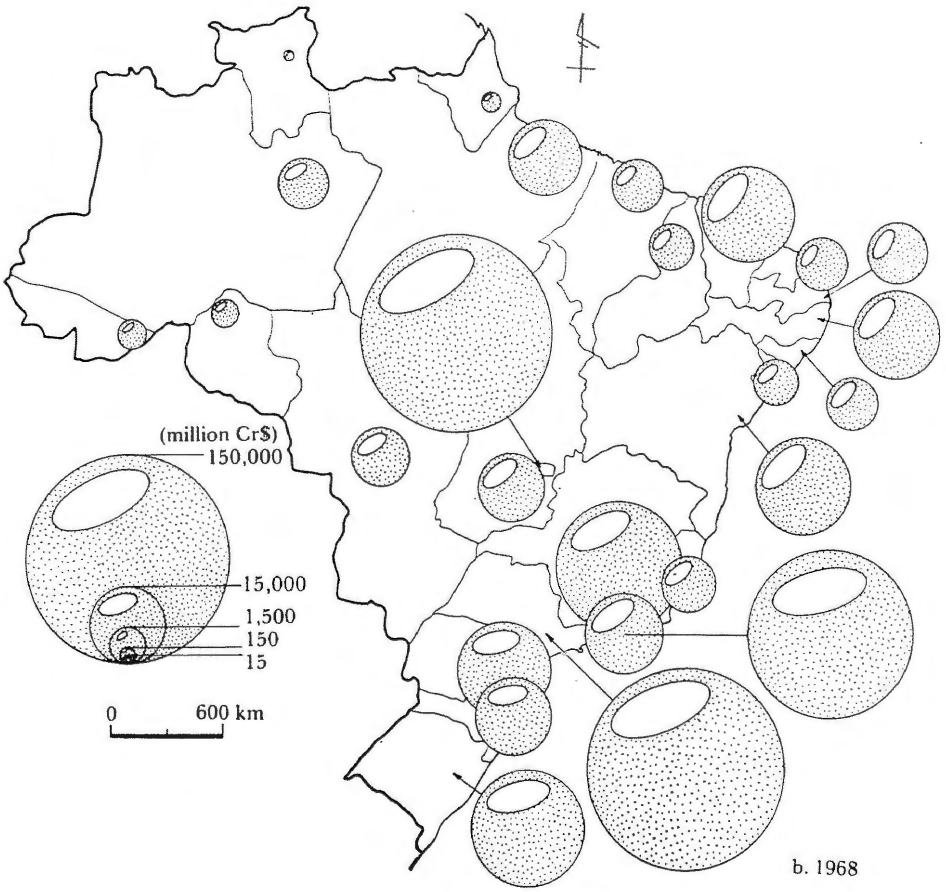


第4—1図　州別貸付金額の分布

Guanabara 州が São Paulo 州よりも優っていたが，1968年になると両者の順位は逆転した．そして，1980年には São Paulo の優位性が確立し，とくに貸付機能にその傾向が顕著である．また，Brasília への遷都が終わり，いまだ建設途上であった1968年には，公立銀行の貸付金額と預金量が全国の州の中でも最も多かった．このような金融活動からみても，首都の建設のためにいかに金融機能が一時的に集中したかを読みとることができる．

II—2　資金の地域的流動

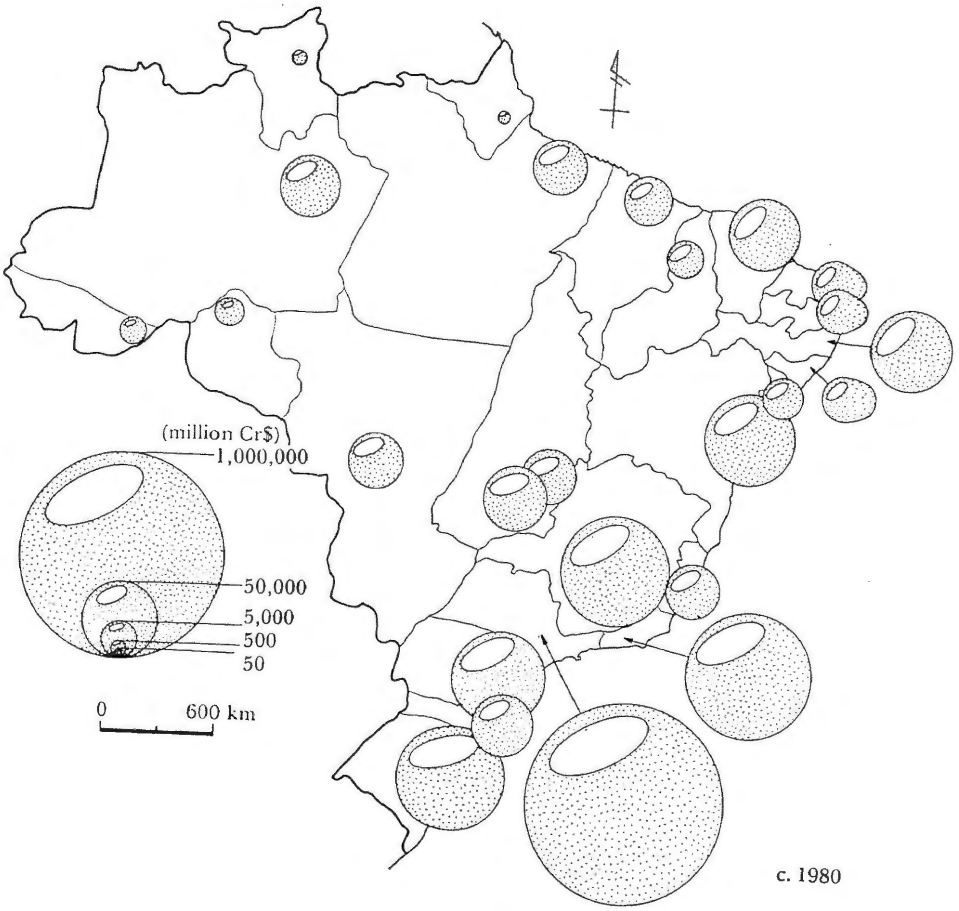
地表面における経済活動は，一様ではない．その不均等発展によって，資金の分布も地域的に均等



第4—2図

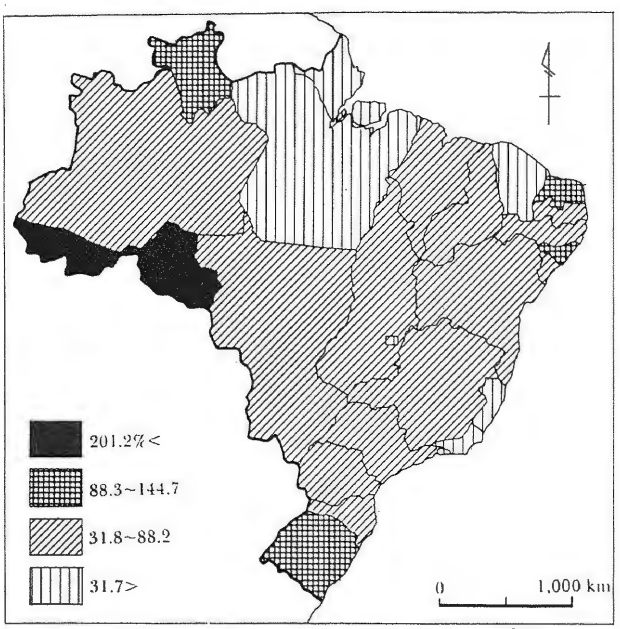
ではなく偏在するために，資金の需要量が供給を上まわる地域には，余剰の資金が流入することによって，資金の地域的流動がおのずと生じる．しかし，資金の地域的流動を直接示す資料が公開されないため，預貸率（貸付金額/預金額×100）をブラジルの州別に計算して，資金が預貸率の低い地区から高い地区へ流動することを推定する．

第5図は，1959・68・80年の3カ年の預貸率を，全国平均値と標準偏差値を用いて階級区分したものである．1959年においては，平均値を上まわったのはわずかに Rondônia (538.9%) とAcre (378.3) 両州のみであった．それに続く州としては，上記2州と同じアマゾン地方の Rio Branco 州 (125.6)， Nordeste 地方の Alagoas (118.0) と Rio Grande do Norte (97.0) 両州，そしてブラジル南



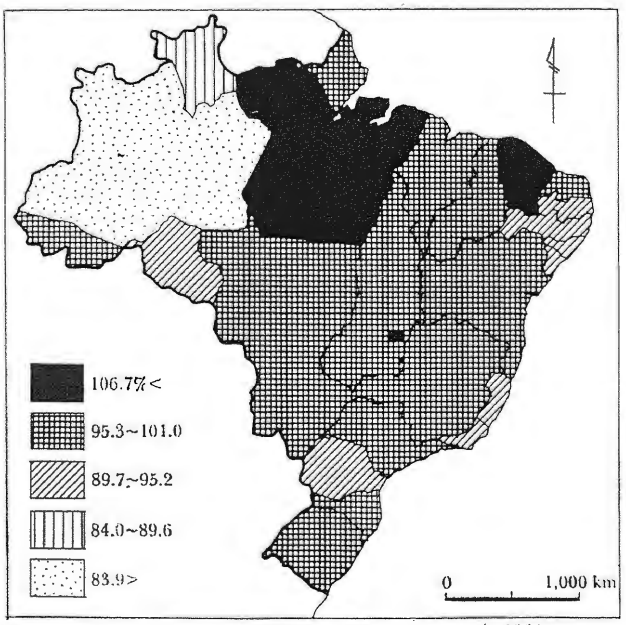
第4—3図

部の Rio Grande do Sul 州 (97.4) である．当時は，金融機能の集積していた Rio de Janeiro と São Paulo 両都市から離れた遠隔の地に，預貸率がかえって高率であった．ちなみに，Rio de Janeiro が位置する Guanabara 州は，預貸率が52.4%，São Paulo 州は32.1%の低率であった．しかし，上記のような預貸率の高率の6州は，Rio Grande do Sul 州を除いては，金融活動の規模は小さい．そのなかでも，Rio Branco 州はブラジルの中でも預金額・貸付金額からみて最小の州であり，当時，最大の金融規模を有していた Guanabara 州の預金額の2606分の1，貸付額の2766分の1の規模であった．したがって，これらの州は預金額がわずかなために，貸付金額が多少増えると預貸率が上昇するような性格を有している州であった．



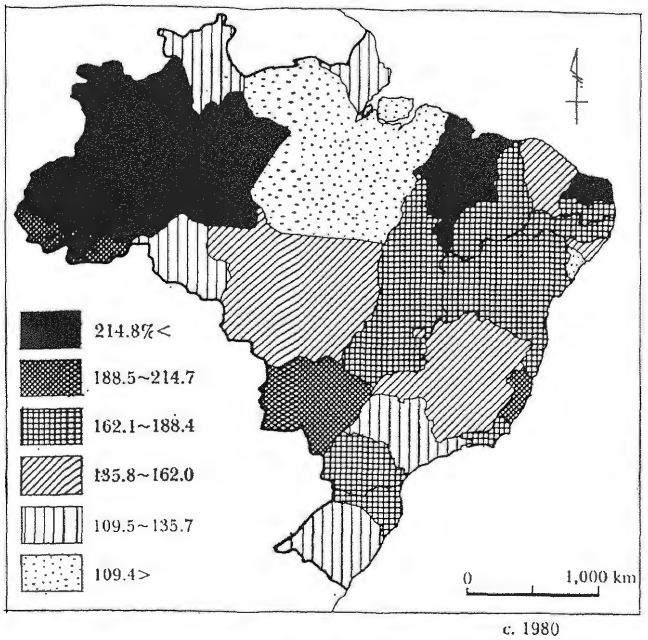
a. 1959

第5－1図　州別預貸率の分布

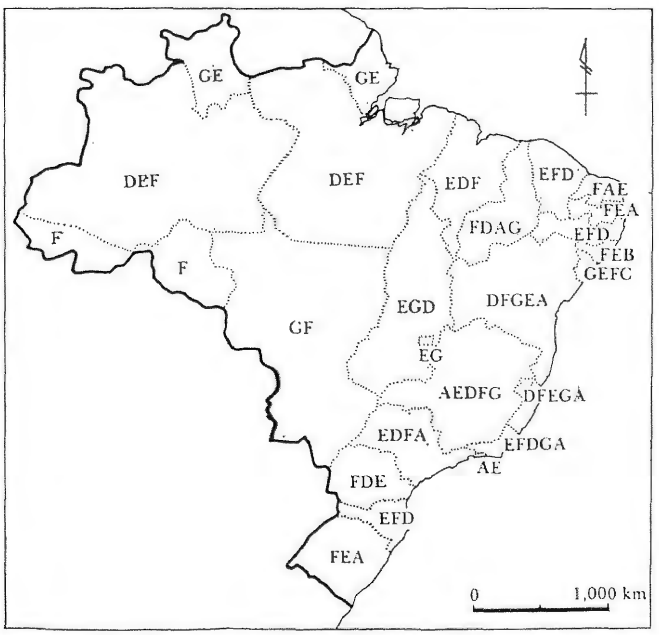


b. 1968

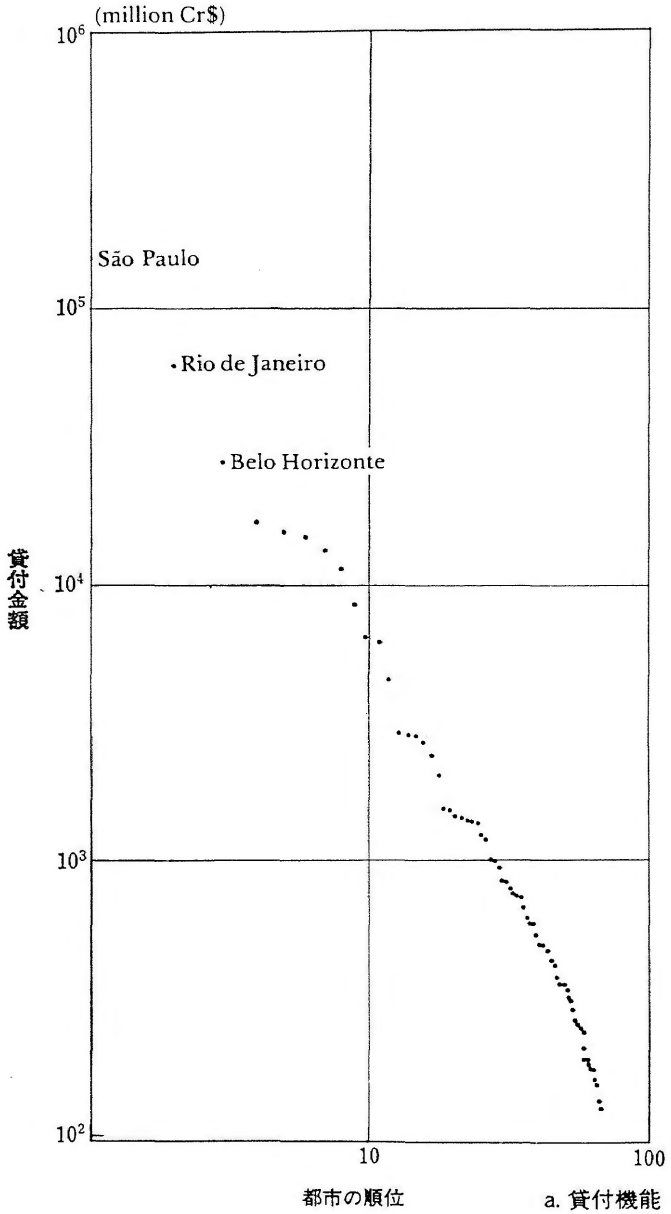
第5－2図



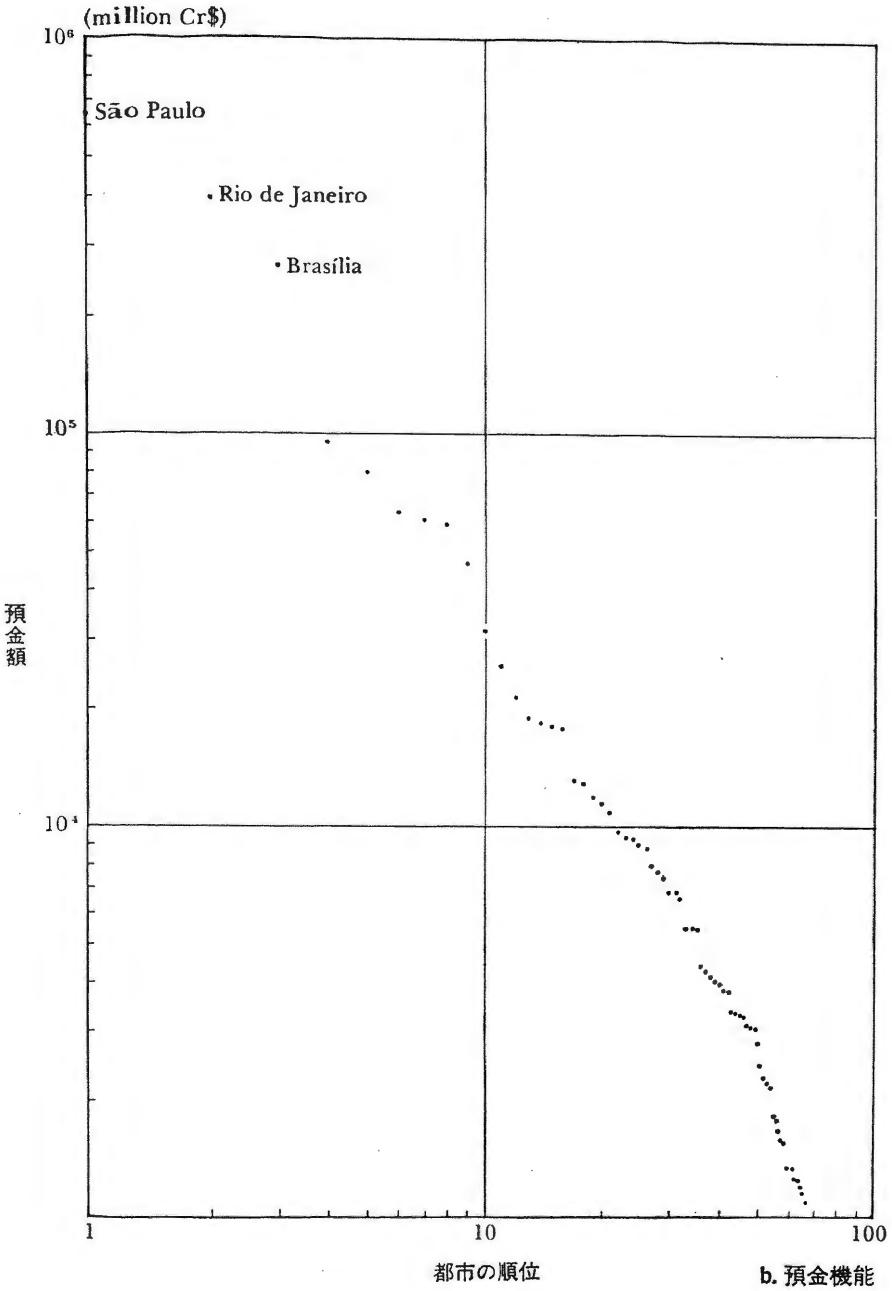
第5－3図



第6図　金融機能の地域的差異（預金，1959年）
（修正ウィーバ法による）
A：政府機関　B：地方自治体機関　C：銀行
D：商業　E：製造業　F：農業　G：牧畜業



第7図　金融機能からみたブラジルの都市の順位規模（1981年）
（資料 ANPES）


(million Cr$)
10⁶
São Paulo
Rio de Janeiro
Brasília
10⁵
預金額
10⁴
1
10
100
都市の順位

b. 預金機能

第7—2図

一方，預貸率の低い州としては，アマゾン地方の Amapá (26.3%)，Pará (30.5) の両州，そして Nordeste 地方の Ceará (30.8)，それらに加えて首都の建設途上であった Brasília (2.8) であった．その他，当時，ブラジル第1の金融機能を有していた Rio de Janeiro の周辺の Rio de Janeiro 州 (25.6) や Espírito Santo 州 (28.0) も Rio de Janeiro に地理的に近隣しているがゆえに，かえって貸付機能を奪われるためか，預貸率が低率であった．

金融活動は地域によって大きく異なると考えられる．金融活動の地域的差異を分析するために，1959年当時における貸付金の投資先を内訳ごとに修正ウィーバ法を使用して，地域類型を検出した結果が第6図であった．貸付金額の最も多かった Guanabara 州では，公共機関に貸付ける割合が卓越し，他の諸州とは大きく異っている．一方，São Paulo や Rio de Janeiro 両州のように，海岸部に位置する比較的開発の古い諸州では，工業投資が盛んであった．そして，Acre, Rondônia や Mato Grosso などの内陸部に位置する州や，Rio Grande do Norte や Paraíba のような Nordeste 地方の州では農牧業への投資が卓越していた．以上のように，貸付金額の内訳は当時の各地域における地域開発の状況を如実に示している．

1968年になると，預貸率には Amazonas 州 (46.9%) を除いて各州ごとに大きな差異はなかった．平均値は95.3%であり，標準偏差値が11.3%と小さいことからもわかるように，ほとんどの州は90%から100%の値に集中した．その中でも，1959年には低率であった Pará (107.9%)，Ceará (112.2) 両州と，すでに首都になっていた Distrito Federal の3州のみは，100%を超えており，年々，投資の極は地域的に移動する傾向にあった．なお，1968年には預金・貸付金量とも，São Paulo 州が Rio de Janeiro の位置する Guanabara 州を抜いて，ブラジル全土の金融空間を組織化する主導的な地位を確保した．

1980年になると，預貸率に再び地域的差異が生じるようになった．預貸率の高率・低率地域のブラジル全土にわたる分布の様相はかなり複雑である．しかし，地方ごとに預貸率の高率地域と低率地域が組み合わされており，地方ごとに資金の循環が相当になされている状況が読みとれる．たとえば，アマゾン地方では，Amazonas と Acre 両州が高率であり，その他の州が全国の平均値より低率である．Nordeste 地方では Maranhão と Rio Grande do Norte 両州は高率地域であり，それに対して Sergipe, Alagoas, Ceará 諸州が低率地域をなしている．いずれにしても，1980年には預貸率の全国平均値は162.1%にも達して，Sergipe 州を除いてすべての州がオーバーローンになっていたため，資金の地域的移動をいかなる地域からいかなる地域へと詳細に論じるには及ばない．

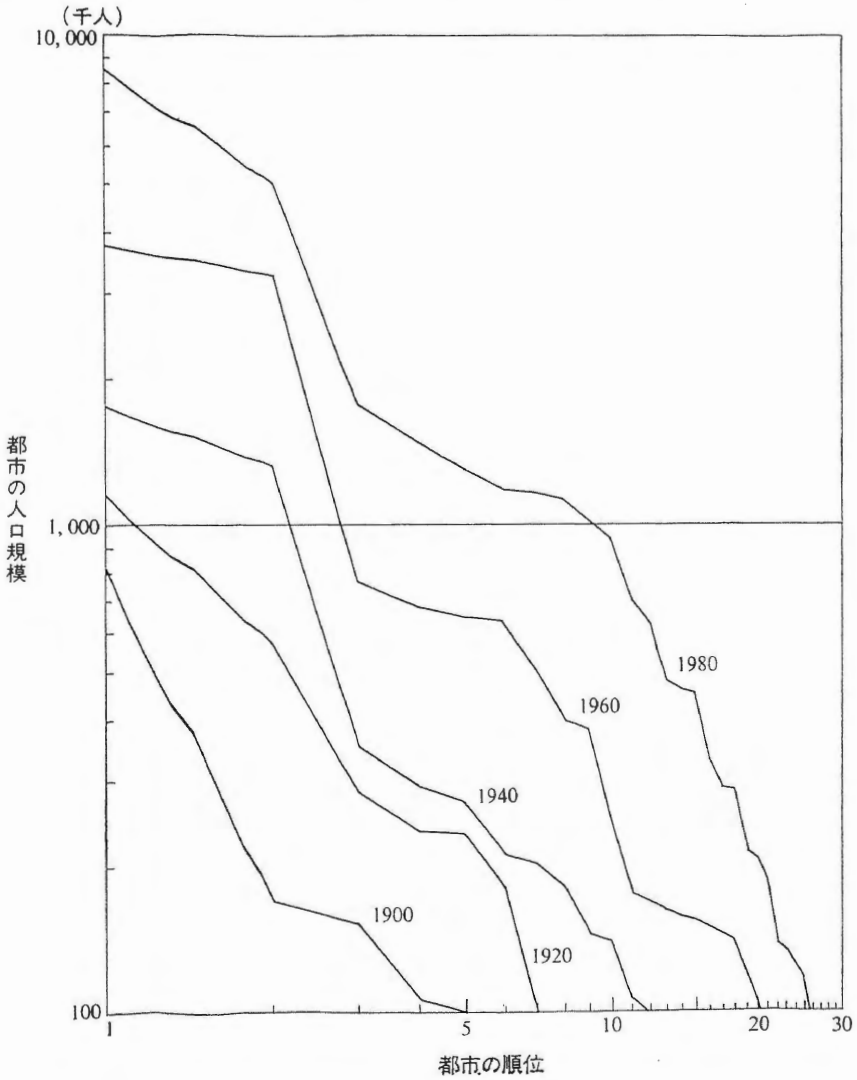
以上のように，ブラジルにおいては資金の蓄積に関する地域的差異は顕著なまでに存在するが，預貸率の地域的差異は比較的少ない．しかし，金融機能を集積している São Paulo や Rio de Janeiro 両都市は，資金を他に流出させる極の役割をつねに果している．

Ⅱ－3　金融機能による都市システム

各国においては，特性を有した都市の集合が存在しており，それぞれの都市は機能的・階層的な関係を保持しながら相互に関連し合っている．現代の都市が他の地域に影響を与える最も重要な機能の

一つとして，経済的中枢管理機能がある．そのうち，都市域における都心部への求心的な機能であり，しかも他地域に影響を与えるものが金融機能であり，それは都市システムを形成する重要なものである．本稿では，金融機能によってブラジルの都市システムがいかに形成されているかを考察してみたい．

第7図は，ブラジルにおいて各都市の預金・貸出金量の規模と順位を比較したものである．両対数グラフを用いて，縦軸に預金・貸付金量をとり，横軸に都市の順位を70位まで並べたものである．都市別にみても，ブラジルにおいては São Paulo と Rio de Janeiro の二大都市の卓越性は顕著であり，人口数からみた都市の順位規模が描く形状とは異なる．すなわち，人口からみた都市の順位規模は，São Paulo と Rio de Janeiro の二大都市が卓越する多核的（polynary）パターンを示しつつも，



第8図　ブラジルにおける都市の順位規模
（資料：IBGE）

基本的にはプライメイト・パターンを示している．しかし，近年，この二つの都市に続いて，Belo Horizonte, Salvador をはじめ100万都市が七つも誕生した．ただし，金融機能からみた都市の順位規模の関連は，まず，預金・貸付金額とも第3位までの都市への集中が著しい．

そして，Primacy Index（第1位都市の規模/第2位都市の規模）は，人口を指標とした場合には1.67であり，金融機能の場合には預金額・貸付金額それぞれが1.65，2.44である．預金額と貸付金額を基にして都市の順位規模の Primacy Index を計算すると，貸付金額によるそれの方が値が高くなる．また，人口数からみた都市の順位規模は，4位から11位までグラフ上で水平方向にほぼ一線に並ぶが，金融機能からみた場合には，急な傾斜で並ぶ．すなわち，同規模のものが少なく，各都市に応じて金融規模が大きく異なる様相を如実に示している．上記のことは，金融機能からみた場合，ブラジルにおいては都市の階層の構成から顕著であることが明確である．

また，金融活動を預金機能と貸付機能の両者で比較すると，前述の通り Primacy Index は貸付機能が預金機能に勝り，São Paulo に貸付機能が著しく集中している状況がわかる．預金額の第3位の都市は Brasília となり，貸付金額では Belo Horizonte となって，預金額と貸付金額からみた場合では順位が異なる．1960年に遷都されて首都となった Brasília が，預金額においてすでに第3位を占めていることが注目すべきことである．

金融機能からみた都市システムの上位階層に位置する諸都市は，ブラジル南東部に集中し，その都市群の中で São Paulo の貸付機能の卓越性が顕著である．貸付金額からみて第5位の Osasco と第10位の Campinas は São Paulo の郊外に位置し，両者は São Paulo 大都市圏内にある．その他，金融機能が卓越した都市は，Brasília を除いて大部分が沿岸部に立地し，都市網の地理的配置の基本的パターンは，植民地時代から継承されてきたように依然として沿岸部に展開する．

Ⅲ São Paulo 州における金融空間の構成

Ⅲ－1 資金の地域的偏在

前章で見たように，ブラジル国内において州単位によって金融機能を分析すると，São Paulo 州が金融機能を最も集積させている．ブラジル国内で São Paulo 州が金融機能を集積させた歴史，換言すれば経済的発展をなした歴史は新しい．ブラジルにおける経済活動の重点が，さとうきび栽培からコーヒーのプランテーションに移行したのは，1930年代に入ってからであった．そして，São Paulo の周辺でコーヒーのプランテーションが開始したのは，1850年代からであった．São Paulo を中心とした地方は，テラロッシャと呼ばれる土壌に被われ，温和な気候下で平坦地に大規模な栽培が展開された．それまでの開発で築かれた交通網が São Paulo を中心にして形成されていたことも，コーヒーの栽培と輸出に好条件になった．しかも，コーヒーの産出国が世界的に限定されていたことにより，コーヒーの生産量が増加の一途をたどり，1880年以降は São Paulo 地方が生産の中心地となった．

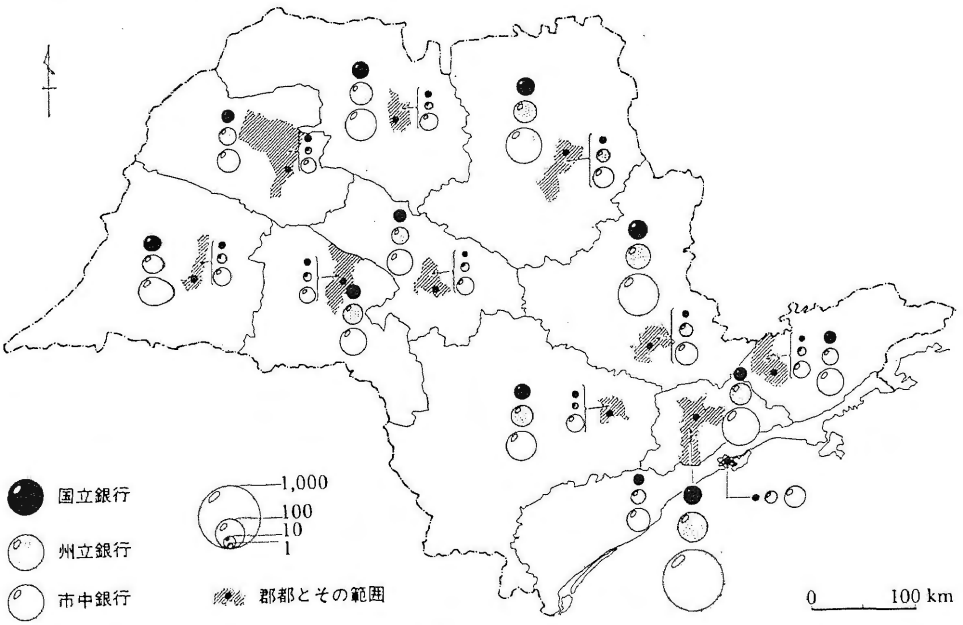
1822年のブラジル独立宣言ののちに，São Paulo は São Paulo 州の州都となり，大学の法学部や多数の学校が設置され，周辺地方の子弟が学生として集まるなど，中心性を高めてきた．都市の機能

が充実するに伴い，周辺農村のコーヒー農園主は，São Paulo へ生活の本拠を移すようになった．ただし，当時のブラジルにおける最大の都市は，Rio de Janeiro であり，1872年の人口統計によると522,651の人口を有し，それに対して São Paulo はわずかに31,385人であり，小都市にすぎなかった．

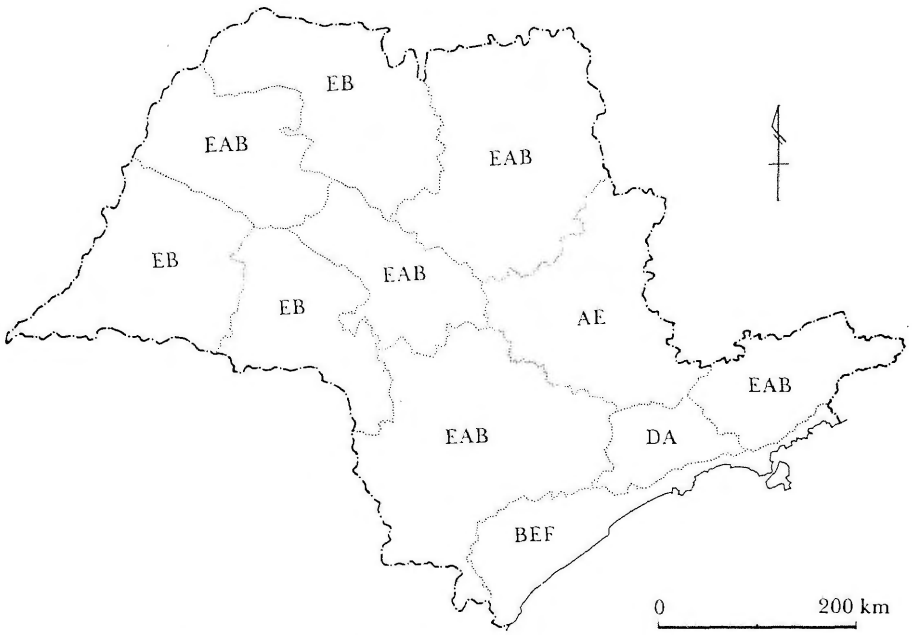
19世紀末以降，コーヒー生産の伸展は商業機能をはじめとする都市機能の拡充を進め，鉄道網の内陸部への拡張がなされた．1860年代から19世紀末まで，鉄道網は São Paulo を中心として州内西北部に拡張し，多数の都市を誕生させた．1891年に共和国憲法の制定によって連邦制を採用したため，輸出税が州の財源となり，コーヒーの輸出の増大によって，州財政が豊かになった．すなわち，コーヒー生産の増大は，直接，生産基盤と生活基盤の拡充に結びつき，São Paulo を中心とした都市網も充実するに至った．

鉄道網の内陸部への拡張は，内陸部に居住していたファゼンデイロを生活や諸事業に好都合な São Paulo 市内に移住させる結果となった．そのため，São Paulo にはコーヒーの生産によって利益を得たファゼンデイロが集まるようになり，その結果消費市場が拡大し，周辺地域への商品の供給も盛んになった．Rio de Janeiro に始まった工業化も，São Paulo へ伝播し，今世紀に入ってからは工業化が主軸となって，州内各地の経済力を高めるようになった．

São Paulo における開発の歴史の新しい状況は，金融機能の地域的分布にも明確に表現されている．São Paulo 州の全銀行数3,254（1980年現在）のうち，実に34.6%が São Paulo 市に集中している．一方，São Paulo 市から北方に向って，Campinas, Ribeirão Preto などに銀行立地の集積が進んだ地帯が内陸部にも形成されている．



第9図 São Paulo 州における銀行の分布（1980年）



第10図 São Paulo 州における金融機能の地域的差異（1980年）
（修正ウィーバ法による）
A：製造業　B：商業　C：金融機関　D：政府機関　E：個人
（資料：SEADE）

第9図は，銀行のカテゴリーを国立・州立・市中の三種類に分類して，São Paulo の11の郡（Regiões）に応じて銀行数を記入したものである．São Paulo 市には市中銀行が圧倒的に多く集積し，一方，São Paulo 市から離れるにしたがって，国立・州立銀行の割合が高くなっている．このことから，連邦州が政策的に自らが経営する金融機関を内陸部へ立地させて，地域開発を推し進めている様相を読みとることができる．ブラジルにおいては，市中銀行網が主として人口集積の都市部を被っているのに反して，国立・州立銀行網がそれらを補完しながら展開していることがわかる．また，郡の中では郡都と郡都外の二つの範ちゅうに分けて記入したが，São Paulo 郡の中では São Paulo 市に集中する割合が高い．しかし，São Paulo 郡以外では，郡都よりも郡都以外の地区における銀行数の方が多い．したがって，大都市を離れると銀行が地域的にも均等に分散して立地する傾向を認めることができよう．

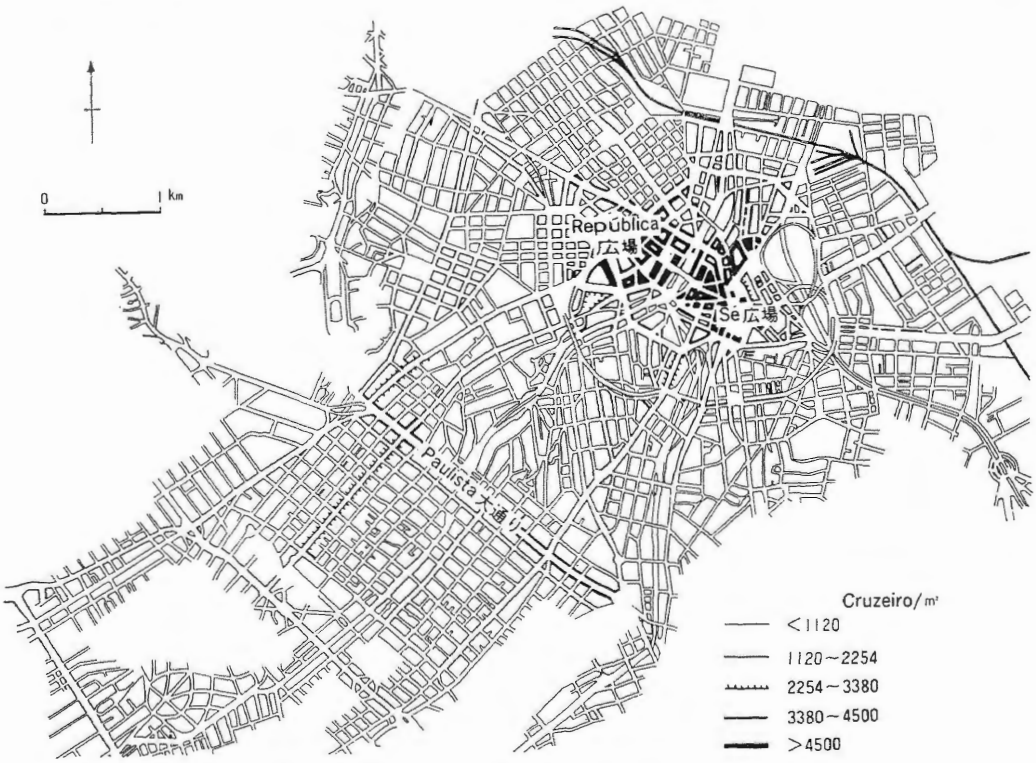
また，第10図は São Paulo 州内における郡別貸出額の内容を示してある．São Paulo 市の貸付先は，政府機関に傾斜していることが特徴的である．そして São Paulo 市周辺部には製造業関係の事業所に貸付ける金融機能が特化し，一方，内陸部に入るにしたがって個人への貸付の割合が高まっている．São Paulo 州内においては，銀行による資金の貸付けに地域的差異があるが，州全体を考察すれば，製造業業種の事業所に対する貸付が29.3%に達しており，金融機関が工業化を推進する重要な役割を読みとることができる．

Ⅲ－2　São Paulo 市都心部における金融空間

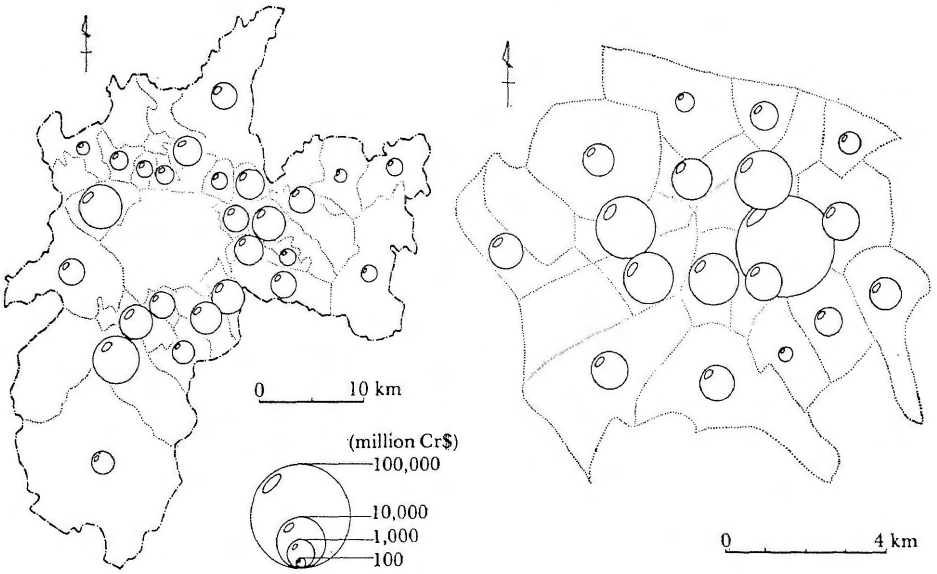
São Paulo 市は，ブラジル第1の都市であるとともに，南アメリカ大陸でも最大の都市である．São Paulo 市は人口849万3,598であるが，37の"município" からなる São Paulo 首都圏は1,271万9,072の人口を有する（1980年現在）．São Paulo の都市圏は，ブラジル国立地理院（IBGE）によるブラジルにおける都市圏画定に基づくと，国内で最高位に位置している．São Paulo 都市圏は，São Paulo 州は勿論のこと，Paraná 州北部，Minas Gerais 州南部，Minas Gerais 州三角地帯，Goiás 州南部，そして Mato Grosso 州中南部を含み，その面積は1,340,393m² に及ぶ．

ブラジル国内においても São Paulo にとくに経済力が集中しているため，São Paulo はブラジル全体の金融活動を支配する力を有している．金融機能は，人間のあらゆる活動の源泉となるため，換言すればブラジルの経済活動の主要なものは，São Paulo において意思決定がなされているといえよう．

São Paulo の誕生は，16世紀中期にイエズス会の修道士が伝道村落を創設したことにさかのぼる．その発祥の地が現在の Sé 広場であり，その周辺は Sé 地区と呼ばれている．第10図に示されている通り，1975年当時，最高地価が Sé 広場から北西方向に位置する República 広場までの長さ約1km，幅約500m の範囲に存在していた．このような最高地価が分布する都心部ともいえる地区を中心として，高地価が周辺部にも分布していた．しかし，Paulista 大通りの沿道には高地価がすでに分布し，



第11図　São Paulo 市中心部の地価分布（1975年）
（資料：São Paulo 市）



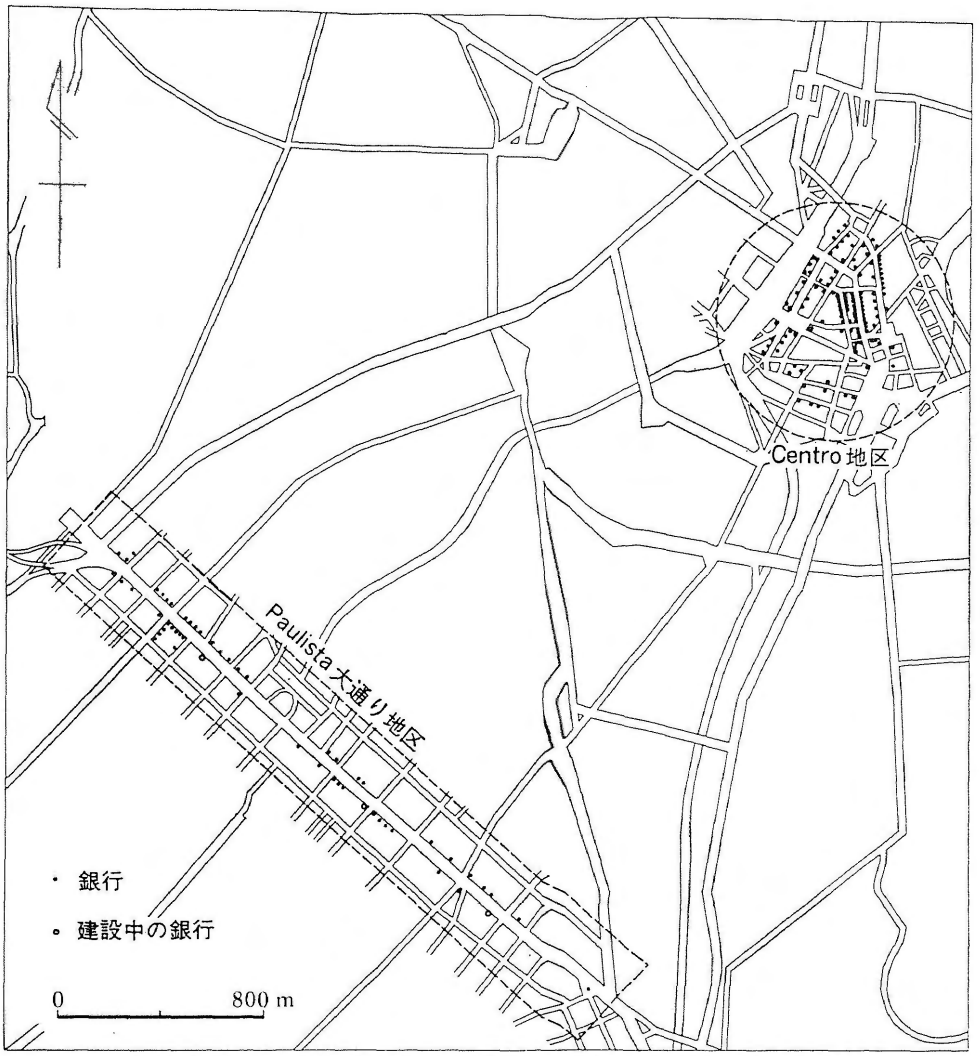
第12図 São Paulo 市における銀行預金額の分布（1980年）
（資料：SEADE）

都心部機能の分散が進んでいたものと考えられる．

第12図は，São Paulo 首都圏における預金額の分布である．最大の預金額を集めている Sé 地区は，1980年において111,683億クルゼイロの預金額を有し，São Paulo 市全体の預金額の実に38.5%を占めている．当地区の銀行店舗数は111であり，市全体の1,109店舗の約10%に相当する．したがって，1店舗あたりの預金額も大きく，当地区の店舗規模が大きいこともわかる．この Sé 地区を囲んで，Santa Ifigênia, Bela Vista, Cerqueira César そして Consolação 地区に預金量の大きな地区が配列する．Sé 地区に対して，概して西側に預金量の高い地区が集中し，とくに Consolação 地区には，Sé 地区に次いで100の銀行店舗が集中している．預金量は，Sé 地区を中心として概して周辺部に向うにしたがって減少する．しかし，Lapa や Santo Amaro 両地区のような郊外に位置する地区にも預金量が高く，人口の郊外化に伴って郊外にも金融空間の形成を認めることができる．

第13図は，1982年7月に現地調査によって，銀行の立地状況を調査したものである．調査の際には，建物の1階にある銀行店舗のみを記入した．預金量の地区ごとの分布によっても明らかなように，São Paulo 市内には旧市街地の Centro と呼ばれる地区に，銀行をはじめ金融機関が集中する地区がある．その地区のうち，とくに Boa Vista, R. 15 de Novembro, そして R. Alv. Penteado の3本の道路に面して銀行がわずか半径400mほどの小面積に高密度に集中している．この地区は，高地価を反映して建造物が高層化しており，空間利用がきわめて集約的でもある．そして，主要な通りは歩行者優先道路になっており，人間の流動量も São Paulo 市内で最も高い地区にもなっている．しかし，この金融街を囲む地帯は，大小規模の商店が混在する商業地区が隣接することも特徴的である．Centro 地区に集積した金融機関が徐々に外延部へ立地を広めてゆかず，現在では Centro の南西部に位置する Paulista 大通りに分散しつつある．

Paulista 大通りは，かつては São Saulo 市の郊外に位置し，都市に供給する果物・野菜を生産す



第13図 São Paulo 市都心部の銀行立地（1982年7月の現地調査による）

る近郊農業地帯であった．しかし，19世紀中頃から São Paulo 市周辺でコーヒーのプランテーションが始まってから，コーヒー生産によって富を得たファゼンデイロが誕生するようになった．そして，都心部に住むファゼンデイロや新たに移住してくるファゼンデイロが，当地区に大きな邸宅を築くようになった．すなわち，コーヒーブームによってコーヒー園が郊外に拡大するに伴って，高級住宅地の形成がなされた．

都心部に近い本地区に，長さ2,800m の Paulista 大通りが都市計画によって敷かれるに及んで，1960年代の後半から金融機関が立地するようになってきた．その時代には，Centro 地区に事業所が狭小な範囲に過度に集中しており，モータリゼーションに対応しきれていなかった．本地区には，まず Centro 地区にすでに立地していた銀行の支店が進出し，さらに南米銀行の例のように本店を移転させる銀行も出現した．金融機能は，従来，都市の成長に伴って求心的に都心部へ集積すると考えられてきた．しかし，都市の成長がより一層進み，しかもその速度が急激である場合には，金融機能の集

積する地区が，旧来の都心部を中心にして多核化する傾向を認めることができる．筆者がすでに東京において認めた事象を São Paulo 市においても確認することができた．

Centro 地区からの業務機能の分散によって，副都心化した Paulista 大通りは不動産業者の格好の投資対象となり，1962年から80年のわずか18年間に，Fernando Silva Pinto と João Antonio Camorero Filho の計算によると，地価は実に1,000倍にも達した．地価が高騰するにしたがい，Paulista 大通りに面して立地し得るのは，金融機関と大企業の事務所などに限定されてきた．しかも，São Paulo が国内で第一の経済力を有するようになったため，外国資本の進出が著しくなってきた．Blanche de Bonneval の計算によると，Paulista 大通りに面する金融機関のうち，42%に相当するものが外国資本か多国籍資本のものである．

都心部からの金融機能の分散を受け入れた Paulista 大通りは，近郊農業地帯からコーヒーのファゼンデイロの高級住宅地へ，そして業務地区へと短期間に変容し，外国資本の進出をも受け入れる様相は，いみじくもブラジルの資本主義経済の発展を地域的に具現化するものであった．

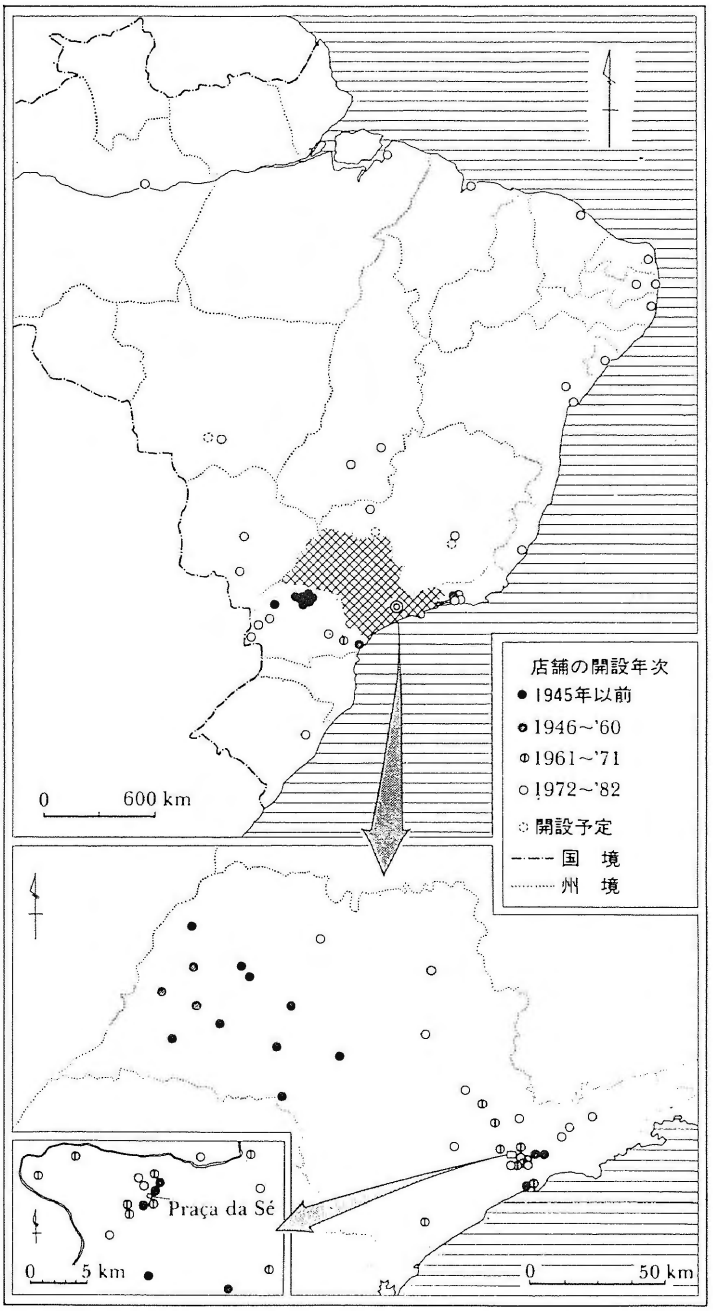
また，現在，Paulista 大通りには業務地区が形成され高層化も同時に進行しているが，この大通りもほぼ居住機能から業務機能へ転換するに及んで，Paulista 大通りよりも南西方向にあたる外縁部の Faria Lima 通りに，金融機能の立地の分散がはじまっている．したがって，São Paulo 市においては金融機関の立地が Centro から外縁部へ分散する傾向を認めることができる．

Ⅲ－3　日系銀行による店舗網の拡大

日本人移民による銀行が，第二次大戦前にブラジルにおいて設立された．その銀行は，“Banco America do Sul Limitada” と呼ばれ，1940年に São Paulo 市に開業した．この銀行の前身は，“Casa Bancaria Bratac de Karlos. Y. Kato” と名づけられて，日系人による開拓者の経済的基盤を整備するための金融機関であった．当時，ブラジルの銀行法が現在のように外国人に対して寛大ではなく，外国人は国内の銀行の株主や組合員になることが出来なかった．そのため，銀行の職員の中でブラジル人およびブラジルに帰化した日本人が重役陣を構成して発足した．

発足した当初は，日本人移住地事務所の会計の窓口を銀行部に移管しただけのものもあり，きわめて小規模であったが，店舗数は15あった．しかし，まもなく第二次大戦に突入してから，日系銀行はブラジル連邦政府の管理下におかれた．戦争という非常事態になると，預金をおろす者が増え，貸付金を回収することが困難となり，現金準備はたちまち枯渇してしまった．この間に商業銀行の国営化が進むとともに，日系銀行の経営にブラジル人が参加するようになった．

第二次大戦は，日本の敗戦に終って移民の間で混乱が生じたが，かえって日系移民の間では，ブラジルに定住するための決心がつくようになった．戦時中には，日本人は国内移転は禁止されていた．そのため，専らその生業である農業に専念し，生産物である米，タマネギ，フェイジョン (feijão)，ジャガイモをはじめ，鶏卵，野菜，果物などのそ菜園芸作物を栽培し，さらに軍需品である生糸・ハッカを生産して財産をなすものもあらわれた．そのため，輸出がほとんど絶えていたコーヒー生産者の収入不足を補うことが出来うる状態であった．したがって，戦争中に蓄積した資金を，まず第一に



第14図　南米銀行の店舗網の拡大（1982年現在）
（資料：南米銀行）

農業拡大のための投資に向け，あるいは農業から商工業への転向のために投資する者も出現した．すべての者が抑圧されていた消費需要を満足させるために資金を消費するようになった．したがって，不動産景気が発生し，農業資本家の都市への進出，自動車・ラジオ・ミシンなどの消費財の奥地への普及等の現象が一挙におこり，日系人による金融活動も活発化してきた．

また，終戦によって日本人の地域的な移住が自由になると，São Paulo 市に集まる人口および São

Paulo 近郊へ移転する人口が増えてきた．São Paulo から西方向に鉄道の Paulista 線に沿って入植が進み，一方，Paraná 州北部の奥地に新しく開かれたコーヒーを生産する開拓地への移転がとくに目覚ましかった．そのため，日本人の入植範囲は，第二次大戦後，急速に拡大し，そのため南米銀行の店舗網も当然拡張した．

第二次大戦が終わる前までは，São Paulo 市を中心として São Paulo 州と São Paulo の南に接する Paraná 州北部に南米銀行の店舗網が限定されていた．しかし，第二次大戦後，まず São Paulo と Paraná 両州に支店密度をより高めると同時に，Rio de Janeiro や Brasília などの主要都市をはじめ，São Paulo 州に近隣する Minas Gerais, Goiás, Mato Grosso, Mato Grosso do Sul の諸州にも店舗網を拡大していった．店舗網の拡大過程においては地方の日本人有力者に代理店営業を依頼し，その店舗の金融機能が高まると支店あるいは出張所に昇格させることも行った．その間，南米銀行の本店は，前述の通り，São Paulo 市の発祥の地である Sé 広場に面した場所から Paulista 大通り地区の新しい金融街に移転した．

現行の銀行法によると，支店の新設が不可能である．したがって，南米銀行の場合には1970年代以降は他銀行を買収する方法で支店網を拡大していった．1973年には，P銀行の17の店舗を買収したため，アマゾン・北東部地方など，それまでの南米銀行の店舗網に存在した空隙地帯を一挙に補てんし，ほぼ全土を支店網で覆い尽す結果となった．

IV むすび

本稿は，新大陸にあるブラジルを研究対象として，金融の空間構造を分析することにより，資金の蓄積・流動がいかになされて金融機能によって空間的秩序が成り立っているかを明らかにしようと試みたものである．明らかになった諸事実をまとめると，以下のようになるであろう．

1. ブラジルにおける金融機関の一大集中地は，Sudeste 地方の São Paulo, Rio de Janeiro, そして Belo Horizonte の三都市を結ぶ三角地帯に存在する．このような様相の下で，金融機能が，国内最大の集積地である São Paulo へより集積する傾向と，同時に周辺部へわずかずつ分散する，相反する二つの大きな傾向を認めることができる．この過程において，金融機関の周辺部への分散には，州・国営の金融機関が担う役割が大きい．

2. ブラジルにおいては銀行が扱う資金の預貸率には，州別にみてあまり差異がなく，州の範囲を超える資金の地域的流動は顕著ではない．とくに，近年では，各州とも預貸率が100%以上を超えるオーバーローンの傾向があり，国全体の資金収支の悪化を読みとることができる．

3. ブラジルにおける都市群をシステム的に理解しようと試みるとき，人口数から都市の順位・規模を経年的に計測すると，Ziph の法則に近づく傾向があることがわかる．しかし，金融機能からみた都市システムは São Paulo と Rio de Janeiro 両都市が卓越する多核的 (Polynary) パターンを示し，この場合には基本的にはプライメイト・パターンに属する一形態とみなすことができよう．そして，ブラジルにおいては都市システムはつねに著しく変動し，この様相は発展途上国に一般的にみられる特色と考えられる．

4. 日系銀行の店舗網の地域的展開過程は，日本人の入植過程をそのまま表現しているともいえよう．しかし，日系銀行が大規模化するに伴って，店舗網はブラジル全土を被うようになって，国内に確固たる金融基盤を築くに至った．この過程は，日系植民がブラジルに同化してゆくそれと同様なものであった．

5. ブラジルで金融機能が最も卓越した都市である São Paulo において，金融機能は都心部（Centro）から新しい金融地区である Paulista 大通りへ分散を進めている．金融機能は，都市の成長に伴って，求心的機能として都心部へ集中を強化するものと考察されてきた．しかし，世界の他の大都市にもみられるように，都心部に位置する金融機能が集積する地区はその近隣に分散化をはじめている．とくに，São Paulo の都市成長は急速であったがために，金融地区の分散化も急速に進行している．

金融地区の分散化によって新しい地区に金融機能が集積する際に，外国資本の金融機関の進出や多国籍企業化が進み，金融地区の質的変容が強いられてゆく様相を，São Paulo 都心部において認めることができる．

本稿を作成するにあたっては，筑波大学 山本正三・西沢利栄両教授，São Paulo 大学 Carlos Augusto F. MONTEIRO 教授，Rio de Janeiro 大学 Milton SANTOS 教授には御教示と激励をいただいた。また，筑波大学松本栄次助教授，研究生 Ilva-Ruri IMAMURA 夫人には資料の提供・整理をたまわった。現地においては，南米銀行の武藤一郎氏と ANPES (Associação Nacional de Programação Econômica e Social) から貴重な資料を提供していただいた。製図は宮坂和人・小崎四郎両氏に依頼した。記して謝意を表したい。

本稿の要旨は，日本地理学会（1983年度春季学術大会）において発表したものである。

参 考 文 献

南米銀行（1955）『南米銀行20年史』120p.

Jean Labasse (1955) : *Les capitaux et la région, étude géographique*, 532p.

Milton Santos (1971) : *Les villes du Tiers monde*, 428p.

Jean Labasse (1974) : *L'espace financier*, 302p.

Milton Santos (1975) : *L'espace partagé*, 405p.

Pierre Monbeig (1976) : *Le Brésil* (4e éd.), 128p.

高野史男・山本正三・正井泰夫・太田勇・高橋伸夫（1979）：『世界の大都市』（上），233p.

Helena Kohn Cordeiro (1980) : *O centro da metrópole paulistana*, 184p.

Philippe Pinchemel (1981) : *La France*, Tome 2, 415p.

Blanche de Bonneval (1981) : *Les transformations de l'Avenue Paulista—le passage de la fonction résidentielle au tertiaire.* Thése pour le doctorat de 3e cycle de l'Univ. de Paris I, 436p.

IBGE (1960, 1969, 1981) : *Anuário Estatístico do Brasil*, 430p. 715p. 795p.

SEADE (1981) : *Anuário Estatístico do Estado de São paulo*, 797p.

EMPLASA (1981) : *Sumário de Dados da Grande São paulo*, 587p.

高橋伸夫（1983）：『金融の地域構造』182p.

Structure de l'espace financier au Brésil

par

Nobuo TAKAHASHI, Nelson Massatake YOSHIKAE

Cet article, qui se proposait de mettre en valeur l'organisation spatiale de l'activité financière au Brésil, après avoir étudié l'accumulation des capitaux et leur flux, a analysé la formation de l'espace lié à la fonction financière. Les conclusions que nous pouvons tirer de cette étude peuvent se résumer brièvement de la manière suivante.

1. Les institutions financières sont largement concentrées dans le triangle formé par les trois grandes villes, régions polarisées, du Sudeste : São Paulo, Rio de Janeiro et Belo Horizonte. La première en particulier joue un rôle attractif très net tendance qui se compléte par un glissement progressif de cette activité vers la banlieue.

2. Le taux de couverture des dépôts par les prêts ne présente pas de grandes variations régionales et les flux régionaux de capitaux ne paraissent pas particulièrement marquant.

3. Le classement des villes par taille et rangs du point de vue démographique est proche de celui fourni par la loi de Ziph. L'analyse de l'organisation urbaine à partir de l'activité financière fait apparaître la prédominance de São Paulo et de Rio de Janeiro et leur caractère polynucléaire.

4. La formation du réseau d'agences d'une banque d'origine japonaise épouse les vicissitudes de l'immigration des japonais au Brésil. Avec la croissance de l'établissement décrit, le réseau vint à recouvrir l'ensemble du territoire national, fournissent une assise solide aux activités ultérieures.

5. Sâo paulo, dont la suprématie financière est indiscutable, voit le coeur de cette activité progressivement glisser du "Centro" vers la nouvelle cité financière le long de l'Avenida paulista. Parallèlement l'implantation de capitaux étrangers et la présence des multinationles se renforçe, introduisant de nouvelles modifications.

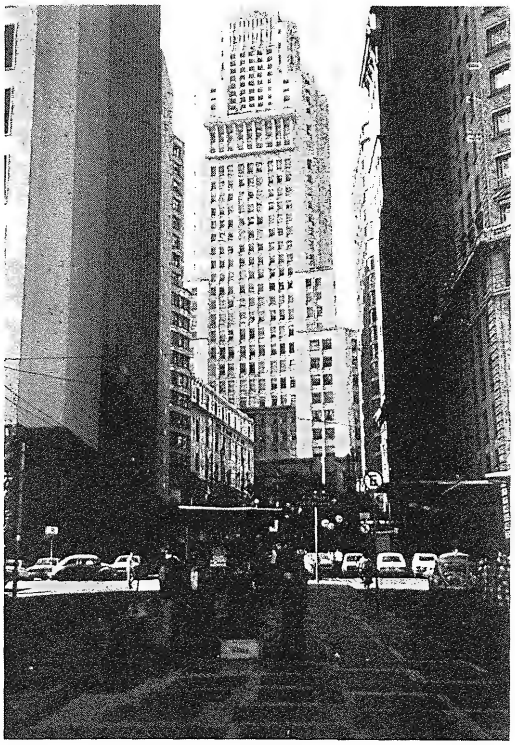


写真1. São PauloのCentroにおける金融地区
正面の建物はBANESPAであり，この地区の中では最も高層のものである（1982年7月撮影）。

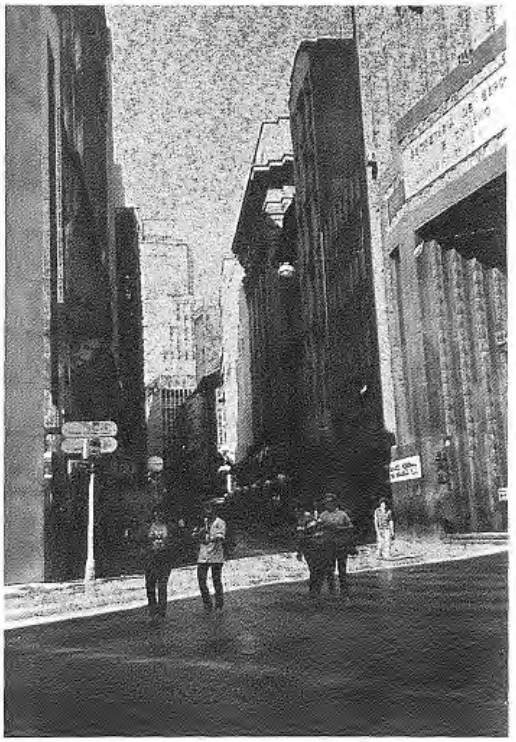


写真2. São PauloのCentro地区におけるAlv. Penteado通り
道路の両側には金融機関が集中している。写真の通り，現在，歩行者優先道路になっており，自動車がそれぞれの建物に直接，近接できない。このことが本地区から金融機関をPaulista大通りに分散させる要因にもなった（1982年7月）。

写真3. São PauloのPaulista大通り
金融機関，大企業の事務所が並び，それらの建物が高層化している。しかも，自動車・人間の通行量も市内では最も多い地区の一つである（1882年7月）。

写真4. São Paulo の Paulista大通り

長さ2800mの Paulista 大通りの南東端に向うにしたがって，建造物が低層化する。しかも，金融機関の集中度も低くなってくる。かってのコーヒーのファゼンデイロが居住していた大邸宅もわずかに残り，劇場・学校などに利用されている（1982年7月）。

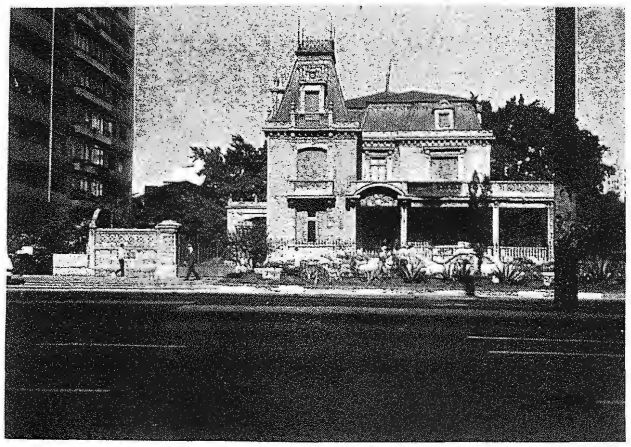


写真5. São Paulo の Paulista通り

現在なお残るかってのファゼンデイロの大邸宅である。この建物は，Matarazzo 財閥の所有といわれ，住宅の状態で保管されている（1982年7月）。

写真6. São PauloのRepública広場の周辺

Sé広場周辺に比較して金融機関の立地は少ないが，高層ビルが林立し，オフィス機能が集中している（1982年7月）。

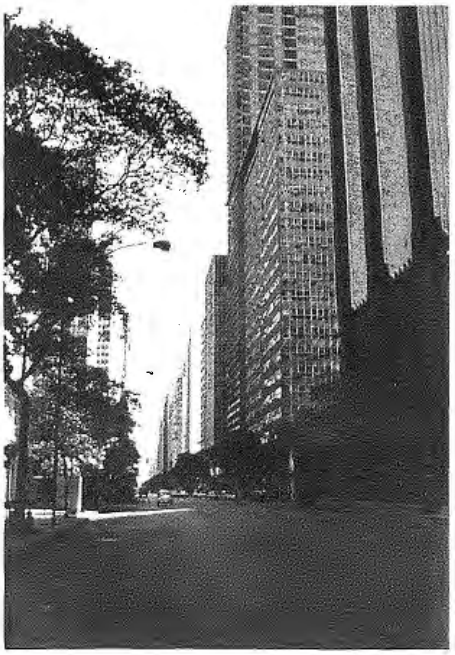


写真7. Rio de Janeiro の Rio Branco大通り
市内で最も金融機関が集中し，建造物の高層化も進んでいる。撮影した日が日曜日であったために交通量がきわめて少ないが，週日は自動車・人間の通行量が市内で最も多い通りである(1982年8月)。

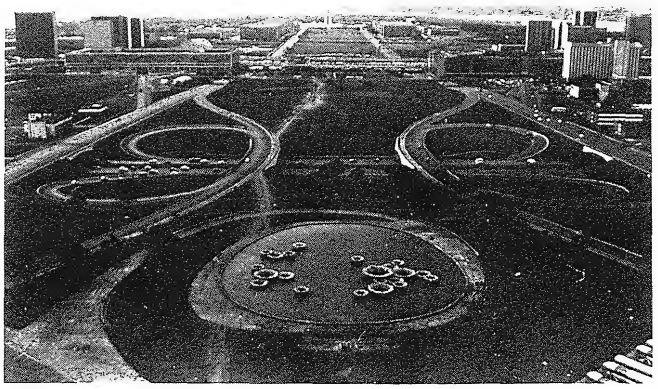


写真8. Brasiliaの都市景観
テレビ塔から三権広場方向を望み，遠景にブラジリア湖が写っている。中景に商業地区があるが，この中に金融機関が集中する地区がある（1982年8月)。

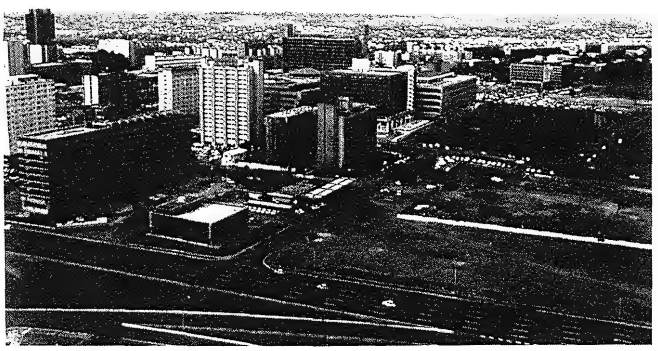


写真9. Brasíliaの商業地区
都心部に位置する商業地区の遠望である。商業地区に指定されながらも，いまだ空地として残されている土地もある。自動車の利用を前提にして設計されたために，道路面積はきわめて広い（1982年8月)。

写真10. Brasíliaの商業地区にある金融街

1960年4月に旧首都 Rio de Janeiroから遷都されてから，急速に金融機能を高めている。現在のところ，金融街は比較的小規模であるが，将来は拡張すると思われる(1982年8月)。

写真11. Porto Alegreの都心部

Porto AlegreはRio Grande do Sul州の州都であり，物資の集散地として百万都市に急成長した都市である（人口112万5901，1980年9月1日現在)。港の近くに高層ビルが並ぶ金融街が形成されている(1982年7月)

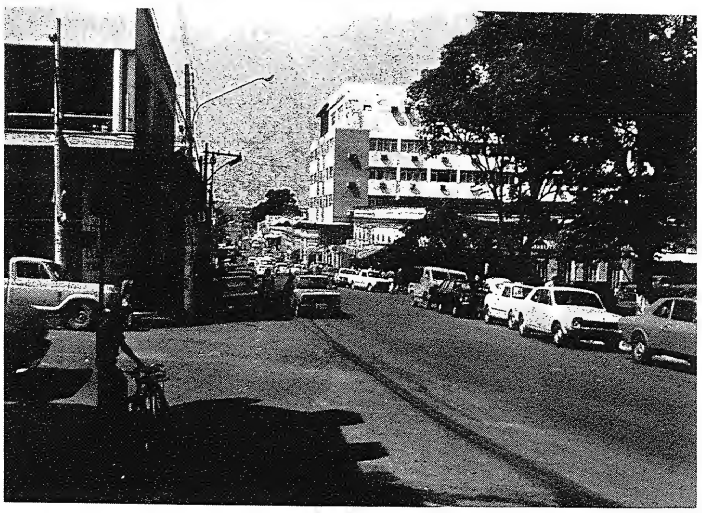


写真12. Porto Velhoの都心部

Porto Velhoはブラジル北部地方 Rondônia 直轄領の主都である。人口は13万4621 (1980年9月1日)であるが，同直轄領がブラジル最大のすず鉱産地であり，その他天然ゴム，金を産するため集散地となっている。人口規模は小さな都市であるが，都心部には金融機関が集まる地区が存在する（1982年8月)。